

志賀直哉年譜考（十四）

——明治四十一年七月から十二月まで——

生 井 知 子

明治四十一年（一九〇八）〔数え二十六歳・満二十五歳〕

7・1（水） 午後、木下利玄が志賀家に来宅。直哉は健康を害して少し寝れている。約束した『ヴァージンソイル』を直哉はまだ読んでいなかったので、かわりに龍土軒で三円の夕食を御馳走する事になり、来られなくなった正親町公和のかわりに里見淳を電話で呼ぶ。その後、皆で志賀家に帰り、春の旅行の思い出話で盛り上がる。近々三人で鹿野山に短い旅をしようと呼し合う。（木下利玄日記）

札幌から武者小路実篤が、直哉に葉書を送る。木下利玄も直哉も本は読めたか、正親町公和から御馳走になれそうだと書いてきた、今日は直哉たちが集まっている日だと思ふ、など。（『武者小路実篤全集』）

柳宗悦が直哉に葉書を書く。十日頃から赤城に行くから八月頃来ないか、ワッツはサイズの問い合わせが来た、三日午後二時頃に、二、三人で行くので在宅して欲しい、など。（『志賀直哉宛書簡』）（柳宗悦全集）

7・3（金） 有島生馬が直哉に、生馬・サイトウ・コジマの写真の絵葉書を書く。麻布八月二十四日の消印。（『志賀直哉宛書簡集』）

7・4（土） 武者小路実篤が直哉に絵葉書を送る。（『武者小路実篤全集』）

7・5（日） 箱根で、直哉は、世界を旅するベルシヤ人と出会う。（『武者小路実篤『ベルシヤ人』一』）

7・7(火) 武者小路実篤に、直哉はベルシヤ人と出会った事を書いた手紙を出す。(武者小路実篤『ベルシヤ人』一)

木下利玄が直哉に葉書を書く。湖畔よりの絵葉書を昨夜受け取った、明日午後、里見淳と来てはどうか、など。(『志賀直哉宛書簡集』)

7・8(水) 朝、直哉は、里見淳と共に木下利玄を訪問。宇宙無限の話などをする。午後、直哉は「ホトトギス」の鈴木三重吉『烏物語』を読む。四時頃辞去。旅行の話はまともまらない。(木下利玄日記)

7・9(木) 柳宗悦が直哉に葉書を書く。昨夜は失礼、赤城へは十二日出発、など。(『志賀直哉宛書簡』)(柳宗悦全集)

7・10(金) 札幌から武者小路実篤が、直哉に絵葉書を送る。直哉の葉書、正親町公和との手紙を昨夜受け取った、十二日夜十時過上野着の汽車で帰京予定、など。(『武者小路実篤全集』)

7・13(月) 午前、直哉は武者小路実篤を訪問するが、帰宅前だったので、上野停車場に行ったが会えず、上野公園に鶴の子や鶯の子を見に行き、偶然ベルシヤ人に再会する。博物館や浅草を案内してから自宅に連れてきて、晩は箱根に一緒に行った友人二人も呼んで歌舞伎座に行く。(武者小路実篤『彼の青年時代』所収日記)(武者小路実篤『ベルシヤ人』三・四)

7・14(火) 午前、ベルシヤ人の案内を頼んでおいた柳谷午郎が志賀家に来宅。午前九時過ぎ、武者小路実篤が来宅。里見淳も居合せ。ベルシヤ人が来宅し、英語で会話。直哉が以前遊びで弾いていたバイオリンを出すと、ベルシヤ人はそれを弾きつつインンドの歌を歌う。午後二時頃、ベルシヤ人と柳谷は帰る。正親町公和が来宅。正親町公和は、昨日、父・正親町実正と議論し、結婚について否定されたという。十時過ぎ、直哉は、正親町公和、武者小路実篤と自宅を出、武者小路実篤と山王山を一周し、死や美について語り合う。(武者小路実篤『彼の青年時代』所収日記)(武者小路実篤『ベルシヤ人』五)

奈良から細川護立が、直哉に絵葉書を書く。十五日の消印。(『志賀直哉宛書簡集』)

7・17(金) 直哉は、里見淳に有島生馬から油絵が届いたから武者小路実篤の家に行くようにと電話をした上、午前十時過ぎ、武

者小路実篤を訪問。午後、皆で正親町公和を訪問。五時頃から武者小路実篤と油絵の額を頼みに八幡屋に行くが高価なので他を探す事にする。武者小路実篤は腹痛のため帰り、直哉は磯谷に絵を預ける。(武者小路実篤『彼の青年時代』所収日記)(M41・7・19有馬生馬宛書簡)

7・19(日)

午後、直哉は里見弾を訪問。武者小路実篤も居合せる。五時前、日吉タカとの縁談の件で高島平三郎が来たと電話があり、武者小路実篤は帰宅。日吉家からは「まだ若いから」という理由で断られたという。八時過ぎ、直哉は、里見弾・園池公致と共に武者小路実篤を訪問。正親町公和も居合せる。十一時過ぎ帰宅。この日、武者小路実篤と正親町公和とが、毎週土曜日に、一枚以上の物を書いて回覧雑誌「ぼや」を出す事を二人で決めた。ぼや／＼していた事からの命名。会はぼや／＼会。直哉も回覧雑誌に賛成。(武者小路実篤『彼の青年時代』所収日記)(武者小路実篤『旧稿の内より(潔の日記)』)

直哉は、有馬生馬に手紙を書く。油絵が届いた、今日、米津政賢・黒木三次の家へ写真を持って行ったが不在だったなど。(M41・7・19有馬生馬宛書簡)

7・21(火)

午後七時近く、武者小路実篤が志賀家に来宅。十一時過ぎまで居る。直哉は山王山の下まで送る。(武者小路実篤『彼の青年時代』所収日記)

7・22(水)

武者小路実篤が直哉に葉書を送る。(『武者小路実篤全集』(『志賀直哉宛書簡』)
武者小路実篤がCからの手紙を読んで泣き、直哉に直哉の美しい心ときたない心についての書簡を送る。(『武者小路実篤全集』(『志賀直哉宛書簡』))

7・23(木)

木下利玄が、日記に、ボヤボヤ会を作り一週に一回必ず「暴矢」という雑誌を作る事にすると記す。(木下利玄日記)
ベルシヤ人が志賀家に来宅。晩、武者小路実篤も来宅。七時半頃ベルシヤ人を宿屋に案内する。ベルシヤ人と話した後、直哉は気分が乱される。直哉は、武者小路実篤にトーマ、クリンゲル、マレース、シユナイダの石版刷りを見

せる。十時頃まで話す。（武者小路実篤『彼の青年時代』所収日記）（武者小路実篤『ベルシヤ人』六）

有島生馬が直哉に絵葉書を書く。パリの消印、麻布八月十日の消印。（『志賀直哉宛書簡集』）

7・24（金）朝、ベルシヤ人が志賀家に来宅。直哉は気分が乱される。午後、直哉は武者小路実篤を訪問、共に木下利玄を訪問。

翌日、直哉は鎌倉に行く予定。（武者小路実篤『彼の青年時代』所収日記）（武者小路実篤『ベルシヤ人』七）

7・25（土）志賀直哉・武者小路実篤・正親町公和・木下利玄による七十一頁の回覧雑誌「暴矢」初号完成。（武者小路実篤『彼の青年時代』所収日記）（武者小路実篤『旧稿の内より』（潔の日記））

この頃か？ 直哉は、鎌倉の有島家別荘に園池公致・菅田敏光・正親町実慶・児島喜久雄らと自炊生活を送っていた里見弴を訪ね、

二、三日滞在する。（里見弴『君と私』十七）

7・30（木）午後、木下利玄が志賀家に来宅して雑談。夕方、直哉は木下利玄と共に正親町公和の家に行き、「暴矢」第一号の正

親町公和の論文『筆の人』を評する。（木下利玄日記）

7・31（金）午後、直哉は武者小路実篤を訪問。三時近く一緒に丸善へ行き、クリンゲル等の絵のある雑誌を見る。（武者小路実篤『彼の青年時代』所収日記）

8・1（土）赤城の柳宗悦が直哉に葉書を書く。葉書ありがとう、鎌倉に行ったそうだね、メートルリンクの「Wisdom & Destiny」（『智慧と運命』）は非常に面白い、赤城に早く来たまえ、など。（『志賀直哉宛書簡』）（『柳宗悦全集』）

8・2（日）直哉は、有島生馬からモデルとの関係を書いた手紙を受け取り、シヨックを受ける。（M41・8・6有島生馬宛書簡）

木下利玄は「暴矢」第二号のために『敷入』の続きを書く。直哉は武者小路実篤を訪問。夜、木下利玄も来る。三人で正親町公和を訪問して話をする。（木下利玄日記）

「暴矢」第二号発行か。

8・4（火）木下利玄が直哉に葉書を書く。木下家で十四日会の予定だが、連絡もなく誰も来ないので不快だとのこと。（『志賀直

哉宛書簡)

8・5(水) 赤城の柳宗悦が直哉に葉書を書く。メーテルリンクは読んだが読めたかはあやしい、など。(『志賀直哉宛書簡』(『柳宗悦全集』)

この頃か?

鎌倉でトルストイの『復活』を読んだ里見弴は、一度は自殺を考えた。その後、上京して直哉に女中・八重との関係を告白しようとしたが、武者小路実篤が来合わせた為、果せなかった。直哉と武者小路実篤は雑誌の発行の計画をしていた。その後、里見弴は、再び鎌倉に赴き、児島喜久雄・正親町実慶に自分が姦淫を犯している事を具体的な事実を隠したまま告白した。園池公致はしきりに内村鑑三の本を読んでいた。(里見弴『君と私』十七)

8・6(木)

直哉は里見弴と共に武者小路実篤を訪問するが不在の為、正親町公和を訪問し、そこで武者小路実篤にも会う。木下利玄も来る。(武者小路実篤『彼の青年時代』所収日記)

直哉は、武者小路実篤と共に、有島生馬に手紙を書く。(M41・8・6有島生馬宛書簡)

8・8(土)

木下利玄が、『暴矢』第三号の原稿『第七義より見たる川開き』と短詩の翻訳を書く。(木下利玄日記)

8・9(日)

直哉は、午前七時二十五分の汽車で志賀英子・直三をつれ日光に赴く。東照宮見物。一昨晚の暴風雨で大谷川は濁流。昨日は男の子が流されたと聞く。英子が発熱。夜、武者小路実篤への便りである『日光より』を執筆。(未定稿40)

『暴矢』第三号発行。(未定稿41『中禅寺より』(A))

8・10(月)

直哉は華厳瀧を見て葛屋へ。志賀英子・直三を船に乗せるが雨が降る。夜、正親町公和への便りである『中禅寺より』(A)』を執筆。『暴矢』は昨日出来たと思う、木下利玄が何を出したかを知るのが楽しみ、『いたづら書き』はまた二人だったね、『暴矢』第四号の『いたづら書き』は自分が筆頭をつけるつもりと記す。(未定稿41)

8・11(火)

直哉は、雨の降る中、竜頭ヶ滝、戦場ヶ原、湯滝などに行き、湯本の松本に泊まる。(未定稿42『中禅寺より』(B))
千葉原の大原から木下利玄が、直哉に絵葉書を出す。十二日の消印。『第七義より見たる川開き』というのを出した、

九日の昼にここに来た、など。（『志賀直哉宛書簡集』）

8・12(水) 大雨。直哉は、中禅寺の蔦屋に戻る。夜、木下利玄への便りである『中禅寺より〔B〕』を執筆。（未定稿42）

8・13(木) 直哉は帰京。（未定稿41『中禅寺より〔A〕』、42『中禅寺より〔B〕』）

8・14(金) 直哉は『小説 網走まで』を執筆。（『網走まで』草稿）

正親町公和の家で十四日会。直哉は武者小路実篤と正親町公和のレクチュアを聞く。（未定稿41『中禅寺より〔A〕』、42

『中禅寺より〔B〕』）

8・15(土) 『暴矢』第四号発行か。

直哉は第四号に『湯本より』を出す。《景色の伴奏として最よきものは、音楽。音楽の伴奏として最よきものは、景色だ》と書く。（未定稿62『偶感（第三）』）

8・17(月) 有島生馬が直哉に絵葉書を書く。パリ二十三日の消印、麻布九月九日の消印。（『志賀直哉宛書簡集』）

8・18(火) 木下利玄が直哉に葉書を書く。十五日の晩に大原から戻った、「暴矢」第二号以下はまだ見ていない、など。（『志賀直

哉宛書簡』）

木下利玄が「大原通信」（暴矢原稿）を書く。（木下利玄日記）

8・22(土) 『暴矢』第五号発行か。

直哉は「暴矢」第五号には何も書けそうもないから、モーパッサンでも翻訳しようと思って“*The Pedlar*”という本の中の『母と子』という昨春面白いと思った作品の冒頭を一寸見直した。晚餐が終わって皆が話をしている内に一人が語り出したという形式で、それを利用して昨春考えた『ダイナマイト』を書くかと思う。「暴矢」第五号には『ダイナマイト』前半を出す。門吉がお力を口説く辺りはモーパッサン“*Vagabond*”（放浪生活）の影響。最初から完全なものを書くこととした『富次の妻』は先に進まないで、どんどん書いて推敲する方が良いと思う。（未定稿67『今

度の小説に就いて』)

8・25(火)

木下利玄が直哉に葉書を書く。「暴矢」第五号は昨日正親町公和の家で見た、など。(『志賀直哉宛書簡』)

この日、直哉は有島生馬へ手紙(12)を書いたか。新『志賀直哉全集』では、明治四十二年のものだと推定されている月日不詳の後半欠の手紙だが、武者小路実篤の『自己の為』(武者小路実篤『彼の青年時代』所収日記のM41・6・11～17に記述あり)という論文への言及、《若さの潮を利用せずに老ひた人の後悔はどうだらう》と鼻紙に書いたとあるのが、「手帳12」の明治四十二年夏頃の所に《○Flood of Youth》を利用せずに老いた人の後悔は想像する事が出来る、吾々は肉体の若さを浪費しないやうに又利用する事を忘れてはならぬ、》とあるのと似ていることから、明治四十一年夏のものだと推定した。また、手紙の中で、生馬ら三人が写った写真の葉書が届いたとあるのが、八月二十四日に届いた葉書のことであると推定した。この手紙の続きが、翌日付の前半欠の有島生馬宛書簡か。

8・26(水)

直哉は、有島生馬に手紙を書く。鳥居忠一が持つて来た木下利玄の結婚話が決まりそうだ、この間中、自分の気持ちはいくらまでにならないほど荒んでいた、など。(M41・8・26有島生馬宛書簡)

8・27(木)

木下利玄が、武者小路実篤の『ペルシヤ人』(M41・8・8～9執筆)と直哉の『網走まで』を読んで、両方共うまい、ことに『網走まで』は志賀近來の傑作と感心する。(木下利玄日記)

木下利玄が直哉に葉書を書く。二十九日の夕方、「暴矢」第六号の原稿を持参の上、志賀家に行くとのこと。(『志賀直哉宛書簡』)

有島生馬が直哉に絵葉書を書く。パリの消印、麻布九月十六日の消印。(『志賀直哉宛書簡集』)

8・29(土)

直哉は『小説 ダイナマイト』を書き上げる。(未定稿43)

「暴矢」は木下利玄と直哉の意見で「望野」と改名。「望野」第六号発行。(木下利玄日記)

直哉は『今度の小説に就いて』を『ダイナマイト』後半と共に「望野」第六号に出す。(未定稿67)

* 武者小路実篤『旧稿の内より（潔の日記）』『ボヤ／＼会』によれば、「暴矢」のあて字は、直哉ことに木下利玄の反対によってやめになり、「望野」となったという。

8・30（日） 午後、武者小路実篤が志賀家に来宅。（武者小路実篤『彼の青年時代』所収日記）

この頃か？ 直哉は手帳に『○数度女の肉体を味はつた経験のある男にとつて、女の肉体は、米の飯のやうな常食になるのではあるまいか、酒好きの酒、烟草好きの烟草より遙かに強い力を以つて、男の心を動かすものに相違ない』と記す。

（「手帳12」補⑥P10）

この頃か？ ニューヨークの田中平一から放蕩をほめかす手紙を受け取り、直哉は「道楽を始めたから自分は墮落した人間だ、

高尚なことは分らないのだと決めつけてしまわないように」という返事を書く。同じ頃、直哉は性欲の圧迫に耐え

られなくなり、キリスト教に対しても懐疑的になり、内村鑑三の許に通うのをやめる。（未定稿④『或る旅行記』五）（M

41・12・24有島生馬宛書簡）

9・1（火） 午後、武者小路実篤から直哉に電話があり、共に柳宗悦を訪問する。ラディリングや石版刷りや写真版の名画を集め

た展覧会を四年後を目標に開きたいと相談する。（武者小路実篤『彼の青年時代』所収日記）

9・2（水） 有島生馬が直哉に絵葉書を書く。パリ三日の消印、麻布九月二十六日の消印。（志賀直哉宛書簡集）

9・5（土） 直哉は『小説「速夫の妹」を脱稿。（『速夫の妹』草稿）

「望野」第七号発行か。

第七号は二百三十六頁あった。（M41・12・26志賀直哉宛武者小路実篤葉書）

9・6（日） 木下利玄が直哉に葉書を書く。明朝九時大学に行く約束をしたが、武者小路実篤の家へ急用が出来たので、明後日に

したいとのこと。（『志賀直哉宛書簡集』）

9・7（月） 午前、直哉は武者小路実篤を訪問。木下利玄、裏松友光も居る。直哉と木下利玄は十一時前に辞去し、大学に時間表

を見に行く。午後五時半頃、武者小路芳子死去。(武者小路実篤『彼の青年時代』所収日記)(武者小路実篤『芳子』)

武者小路実篤が直哉に、芳子死去との葉書を送る。(武者小路実篤全集)

9・8(火) 午後、武者小路芳子の御悔やみに、直哉は武者小路家を訪問。(武者小路実篤『彼の青年時代』所収日記)

9・12(土) 細川護立が直哉に絵葉書を書く。(志賀直哉宛書簡集)

午後、武者小路実篤が志賀家に来宅。七時頃帰る。武者小路実篤は直哉に「帝国文学」への投稿を勧める。直哉もその気。(武者小路実篤『彼の青年時代』所収日記)

*「帝国文学」十月号の帝国文学会・新入会員欄に志賀直哉の氏名あり。

*当時の「帝国文学」編集者は小林愛雄。(座談会『明治の青春』)

「望野」第八号発行か。

9・14(月) 晩、直哉は武者小路実篤を訪問。(武者小路実篤『彼の青年時代』所収日記)

9・15(火) 午後、直哉は大学で木下利玄と会い、御殿の芝生に寝転んで木下利玄と横尾照子との結婚に旧臣が反対している事に対する憤りを聞かされる。直哉は「革命をやってやっつけろ」と激励する。直哉は木下利玄と共に正親町公和家へ寄り、六時少し前、武者小路実篤を訪問。(木下利玄日記)(武者小路実篤『彼の青年時代』所収日記)

柳宗悦が直哉に手紙を書き、義兄(加藤本四郎)が舌がんで悪いため、直哉が言っていた注射でがんの治療がうまい人を教えて欲しいと頼む。(柳宗悦全集)

9・16(水) 十一時半新橋発の汽車で黒田が渡米の途に着く。直哉・木下利玄・武者小路実篤らも見送りに行く。夕方、直哉は武者小路実篤を訪問。(9・15木下利玄日記)(武者小路実篤『彼の青年時代』所収日記)

9・19(土) 「望野」第九号発行か。

9・21(月) 有島生馬が直哉に絵葉書を書く。「独歩集」が昨日届いた、岩下家一が一週間来てロンドンに行った、など。(志賀直

哉宛書簡

9・26（土） 午後、武者小路実篤が志賀家に來宅。木下利玄も來宅。木下利玄の結婚話は益々難しい。武者小路実篤は五時頃帰る。

（武者小路実篤『彼の青年時代』所収日記）

〔望野〕第十号発行か。

9・27（水） この日の出来事を、直哉は『記憶』として執筆。新聞連載の『三四郎』は、三四郎が野々宮の妹を病院に訪ねていく

所（三の十二）。末尾に《四十一年十月》と執筆時期が記されている。（未定稿48）

9・28（月） 午前五時頃、副島家で書生をしていた岡野忠太郎（女中Cの兄）が脚氣衝心で死去。直哉は武者小路実篤から電話で

連絡を受け、午前七時半頃、武者小路実篤を訪問。共に木沢病院へ行く。直哉は一週間ほど前から風邪をひいて寝ていたが、この日は、いくらか回復。晩、忠太郎の父母、妹（女中C）、叔父、義兄も上京。善光寺で通夜。（武者小路実篤『彼の青年時代』所収日記）〔手帳14〕補⑥P48、49

*『過去』によれば、忠太郎から手紙で書生先を依頼された直哉は、武者小路実篤に相談し、勘解由小路資承が、その親戚の副島家に世話した。忠太郎の死は、朝、武者小路実篤からの電話で知らされ、直哉はすぐ武者小路家へ行って、一緒に番町の病院へ行つた。間もなく辞去。午後は雨。武者小路実篤からCたちが上京して病院に居る事を知らされるが、直哉は嫌で行かず、武者小路実篤にひどく怒られた。夜、新宿のCたちの宿へ会いに行つたという。

*当時、副島家の当主は種臣の嗣子・道正、種臣未亡人は正子（阿川弘之『志賀直哉』）

木下利玄が直哉に手紙を書く。昨秋書いた『燈籠ながし』でこの度の責をふさぐ、昨夜、武者小路家に行き、勘解由小路資承に会い、今度の縁談は、もうとても駄目だろうと言われた、とのこと。（『志賀直哉宛書簡』）

9・29（火） 武者小路実篤が直哉に、正親町公和の家に行つたのなら、なぜ武者小路の家にかけてくれなかったのかと怒りの葉書を出す。（『武者小路実篤全集』）

10・1(木) 武者小路実篤が直哉に葉書を送る。(『武者小路実篤全集』)

信州旅行中の園池公致が直哉に絵葉書を書く。(『志賀直哉宛書簡』)

柳宗悦が直哉に葉書を書く。直哉の病気はもういいのか、医者を教えてください、明晩行く、など。(『柳宗悦全集』)

10・2(金) 朝、直哉は正親町公和家に電話をし、正親町家に行っていた武者小路実篤にいい事があるからと来宅を勧める。三時頃、武者小路実篤が志賀家に来宅。クリンゲルのインテルメチーを見せる。武者小路実篤は風邪で夕食前に帰る。

(『武者小路実篤』彼の青年時代』所収日記)

10・3(土) 木下利玄が直哉に手紙を書く。原稿を同封したか。(『志賀直哉宛書簡』)

「望野」第十一号発行か。

10・5(月) 武者小路実篤が直哉に葉書を送る。直哉の家から帰ってから風邪で病床にあり、クリンゲルの絵を何度も見ている、など。(『武者小路実篤全集』)

10・6(火) 直哉は朝から大学に行き、黒木安雄の「漢文」、ローレンスの「英文学史」、元良勇次郎の「心理」などの授業を受ける。「望野」の責めふとぎに、その日の出来事を『今日の日記』(一名「疲労」)として執筆。(未定稿44(『東京帝国大学

一覽』明治四十一年～四十二年』)

10・7(水) 午後四時から正親町家で、沼津に行く正親町公和の送別会があり、直哉・武者小路実篤・木下利玄が行く。(『武者小路

実篤』彼の青年時代』所収日記)

有島生馬が直哉に絵葉書を書く。岩下家一の書き入れあり。パリの消印、麻布十月二十六日の消印。(『志賀直哉宛書簡集』)

10・8(木) 直哉は丸善で武者小路実篤に会う。絵を売っている店に寄り、一緒に武者小路実篤家に行く。直哉は大学には閉口しているが、二時半頃いやいや登校。(『武者小路実篤』彼の青年時代』所収日記)

10・9（金） 有島生馬が直哉に絵葉書を書く。昨朝、有島武郎が結婚するという報知が来て大いに喜んだ、直哉の岩下家一宛の手紙が届いた、など。（志賀直哉宛書簡）

10・10（土） 朝、武者小路実篤が志賀家に来宅。木下利玄が午後から来る。ドイツ語を勉強する。武者小路実篤は五時まで居る。

（武者小路実篤『彼の青年時代』所収日記）

「望野」第十二号発行か。

10・14（水） 午前八時、登校前に直哉は『消息 沼津の沙鷗へ』を執筆。自分は大学には合わない、「望野」もとうとう十二号になつたが、今のような状況では実のあるものなど、とても書けないと記す。（未定稿45）

午前十一時頃、直哉は武者小路実篤を訪問。大学に行くのは軽蔑されるからやめようと思つてゐる、しかし大学をやめて自家に居る不愉快の方がなお不愉快であるし、大学に行つてゐるのを皆が喜んでゐるので、大学をやめる事をやめたと語る。共に中野に行き、四時過ぎ四谷停車場で下車。木下利玄が歩いてゐるのを見付け、尾行する。六時過ぎからドイツ語の勉強をし、直哉は九時過ぎまで武者小路実篤家に居て帰る。（武者小路実篤『彼の青年時代』所収日記）

この頃か？ 直哉は『郡の懺悔』についてのメモを手帳に記す。（「手帳12」補⑥P10～11）（↓後の「ノート5」補⑥P24～20『広田の懺悔』）

10・15（木） 朝、直哉は『濁つた頭』の元となる夢を見る。（「手帳12」補⑥P11）

有島生馬宛の葉書に、「帝国文学」へ出した小説は没書だ、大学は西洋人の講義がづらい、語学の力がないことを痛切に感じた、毎日学校に侮辱されるに行くような気がするが、今やめると一騒動なので我慢していると記す。（M41・

10・15有島生馬宛葉書）

*『網走まで』が没書になつたので、直哉は一寸不快に感じ、会費を一度払つただけで帝国文学会を脱会した。（『細

川書店版「網走まで」あとがき」

10・17(土) 正親町公和が直哉に絵葉書を書く。『夕波』が届いただろう、もう先週の「望野」が来そうなものだ、「帝国文学」は

来月号に回ったのではないのか、など。(『志賀直哉宛書簡』)

「望野」第十三号発行か。

10・18(日) 直哉は「二三日前に想ひついた小説の筋」を執筆。落ち着いて筆を執れない状況なので、折角浮かんだ筋だけ書いて

おき、「望野」の責ふさぎにもした。(『濁った頭』草稿)

10・20(火) 柳宗悦が直哉に葉書を書く。「暴矢」をどうもありがとう、「網走まで」は「帝国文学」に出したか、『ダイナマイト』

は読んで嫌な気持ちばかりした、一週に三十四、五時間では嫌気がさすだろう、など。(『志賀直哉宛書簡』)(柳宗悦全集)

10・21(水) 直哉は「沙鷗への第二信」を執筆。昨日また文部省美術展覧会(第二回文展)を見ての感想。(未定稿46)

月二回発行の「麦」第一号完成。メンバーは、当初、里見弴(伊吾)・正親町実慶(青鯛)・田中治之助(雨村)・園池

公致(帆七)の四人、更に児島喜久雄(KIKU)・中村貫之(貫)・菅田敏光(菅敏)が加わる。(里見弴『君と私』十九

二十二)(座談会『白樺』座談会)(里見弴『雑記帖』)

里見弴の『行商とお富』『補言』翻訳『二軒宿(ドオデエ)』『矮小の二兵士(マウパッサン)』、正親町実慶の『おもと』

『おもと』に就いて『若き男女(散文詩)』『麦日記』、園池公致の『訪問』『被強請原稿(葉書文)』、田中治之助の

『秋晴(写生文)』『伊香保雑感(和歌)』翻訳『伯林の包圍(ドオデエ)』掲載。(里見弴『雑記帖』)「麦」第一号批評欄・補

④P483、484(式場隆三郎『白樺の人々』S16・6~10「文学界」)

10・23(金) 里見弴が直哉に絵葉書を書く。一昨夜「麦」の第一号が出来たことを述べ、『速夫の妹』『網走まで』の感想を記す。

(『志賀直哉宛書簡』)

10・24（土）直哉は、この到着いた正親町公和の『海のほとり』と直哉への返事を読み、『沙鷗への第三信』を執筆。転科する気になって増やした科目が四、五あってノートを写すのに忙しい、夏目漱石の『三四郎』は毎日読んでいるが筆の勢いで書き殴るといふ欠点があるような気がして皆ほど感心はしない、一昨晩は六時に「心理」が済んだ帰りに丸の内で見灯行列を見た、昨日は木下利玄・徳川慶久・斉藤博と細川護立の所に行った、冬に語学試験の準備に沼津に行きたいので、三週間ほど借りられる所を探して欲しい、など。（未定稿47）

〔望野〕第十四号発行か。

10・26（月）

神戸衛生院の郡虎彦が直哉に手紙を書く。親子の関係、キリスト教について、など。（志賀直哉宛書簡）

10・28（水）

直哉は、有馬生馬に手紙を書く。英文科をやめて美学科へ変わることにした、英人のわからない講義の代わりに、関野の法隆寺建築の研究や大塚のギリシャ建築の話の聞くと面白いためだ、七月二十五日から毎土曜、ボヤ／＼会の「望野」という回覧雑誌を作っている、今度出る十五号に綴じ込んだ作品三つを来月の末に送る、この頃、内村鑑三のところに行くのをやめている、やめつきりによすという気にもなれない、随分長く御世話になったので非常にすまない気もする、また毎日曜日行くとすると、それどこかすまない気がして、少し弱っている、など。（M41・10・28有馬生馬宛書簡）

正親町公和が沼津から武者小路実篤と寄せ書きで、直哉に絵葉書を書く。「望野」の第十七号か八号あたりに懸賞募集をしようと思っている、など。（志賀直哉宛書簡）

10・30（金）

武者小路実篤が正親町公和と連名で、沼津桃郷から直哉に葉書を送る。（武者小路実篤全集）

10・31（土）

直哉は『小説 離縁』を脱稿。（『孤児』草稿）

沼津から帰った武者小路実篤を、晩、直哉と木下利玄が共に訪問。（武者小路実篤『彼の青年時代』所収日記）

〔望野〕第十五号発行か。

11・1(日) 直哉は、「麦」第一号に批評を記す。(「麦」第一号批評欄)

「麦」第二号完成。(里見弴『雑記帖』)

里見弴の『失はれたる愛』『梨本で』『補言(第七義的)』『女囚(偶感)』翻訳『黄なる幻(詩)』ゴータイエ『地の四季(詩)』ゴータイエ、田中治之助の『親友』、正親町実慶の『幼友達』『迷葉(新体詩)』『親翁の山(新体詩)』『感じて見た展覧会』『新体詩に就て』『申訳』、園池公致の『歌舞伎談義』『第二回美術展覧会の評』、児島喜久雄の『フリッツ・フォン・ウーデ』掲載。(里見弴『雑記帖』)「麦」第二号批評欄・補④P485-488(式場隆三郎『白樺の人々』)

11・3(火) 直哉は、「麦」第一号に批評を記す。(「麦」第一号批評欄)

11・4(水) 有島生馬が直哉に絵葉書を書く。グレ・シユル・ロワンの消印、麻布二十二日の消印。(『志賀直哉宛書簡集』)

11・6(金) 木下利玄が「望野」の原稿『二月堂』を書く。(木下利玄日記)

11・7(土) 「望野」第十六号発行か。

11・8(日) 十一時、直哉は柳宗悦と共に武者小路実篤訪問。(武者小路実篤『彼の青年時代』所収日記)

「麦」第三号発行。(里見弴『雑記帖』)

里見弴の『伊豆山で』『天長節の朝』『燭台』、正親町実慶の『恋の園』『申訳』翻訳『老婆』、里見弴・園池公致の『若葉』掲載。(里見弴『雑記帖』)「麦」第三号批評欄・補④P488、489

11・10(火) 直哉は、凶師尚武に葉書を書く。今度の土曜より、来週の火曜か木曜の七時に来てくれた方が好都合だ、など。(M41・11・10凶師尚武宛書簡)

11・12(木) 武者小路実篤が直哉に葉書を送る。明日、勘解由小路資承と共に直哉の所に行く、一緒に催眠術を見に行こう、など。(『武者小路実篤全集』)

11・13(金) 午後から直哉は武者小路実篤を訪問。木下利玄も来る。「麦」第三号の合評をする。(↓「麦」第三号批評欄)夕食後

の六時頃、三人一緒に中央会堂に催眠術を見に行く。催眠術の途中で武者小路実篤が脳貧血になり、直哉と武者小路実篤二人は退場。大騒ぎして病院へ連れて行く。九時過ぎ、木下利玄も武者小路家に来る。二人は十時まで居る。

（武者小路実篤『彼の青年時代』所収日記）（木下利玄日記）

- 11・14（土）朝、直哉は武者小路実篤に電話をかけて風邪をひいて一日寝るから行けないと告げる。（武者小路実篤『彼の青年時代』所収日記）

直哉は『鯖壳木四郎（お伽話）』を執筆。次号は「とむらひ嫌ひの満公坊」という山伏の話を書くこと正親町公和に予告しておいたが止める、小説『糶斗菜』（↓未定稿109『小説 糶斗菜』）を書けるといいが無理と記す。（未定稿49）

「望野」第十七号発行か。

武者小路実篤の『道学者』（M41・11・14執筆）を掲載か。（武者小路実篤全集）第一巻・解題）

- 11・15（日）朝から夕まで武者小路実篤が志賀家に来宅。（武者小路実篤『彼の青年時代』所収日記）

- 11・16（月）午後四時半から二時間にわたり、東京帝国大学で、スエン・ヘディン博士が探検についての講演をした。（M41・11・

18「東京朝日新聞」）

- 11・17（火）異母妹・志賀昌子が生まれる。（志賀家系図）

直哉は『誕生』を執筆。昨晚、スエン・ヘディン博士の講演を聞いて帰って来た後の、志賀浩のお産前後の志賀家の様子を書く。（『子供四題』二三「誕生」草稿）

直哉は『河畔の青野（夢）』を執筆。（未定稿50）

柳宗悦が郡虎彦と神戸から直哉に葉書を書く。（『志賀直哉宛書簡』）（『柳宗悦全集』）

この頃 かねやが、最初は昌子の乳母として志賀家に奉公を始め、以後二十年以上仕える。後には箱根強羅の別荘番になる。

（阿川弘之『志賀直哉』）

11・19(木) 武者小路実篤が、木下利玄や「麦」同人の里見弴・園池公致・田中雨村と寄せ書きで、直哉に葉書を送る。(『武者小路実篤全集』)

正親町公和が、沼津から正親町実慶と寄せ書きで、直哉に絵葉書を書く。「望野」第十七号はまだ届かない、二、三日前に第十八号分は出来上がった、明日上京すること。(『志賀直哉宛書簡集』)

11・20(金) 郡虎彦が神戸から、直哉に、生き方についての悩みや性欲についての手紙を書く。(『志賀直哉宛書簡』)

二十三日にかけて、直哉は「ノート5」に「富次の妻」を書く。(補⑥P24)(↓未定稿65『富次の妻』、66『転逃』)

11・21(土) 志賀直方の長男・志賀昇が生まれる。(志賀家系図)

「望野」第十八号発行か。

11・22(日) 児島喜久雄が直哉に、ホフマン画の絵葉書を書く。(『志賀直哉宛書簡集』)

11・24(火) 直哉は『小説 商人の子』を執筆。時任惣次郎という登場人物あり。「望野」第十九号にのせたか？(未定稿51)

11・27(金) 里見弴が直哉に絵葉書を書く。「麦」第二号が手元にあるそうだが、その評を早く聞きたいとのこと。(『志賀直哉宛書簡』)

柳宗悦が、加藤本四郎の死去(十一月二十二日死去・二十六日葬儀、「東京朝日新聞」広告)に対する直哉のお悔やみへの礼状を書く。(『柳宗悦全集』)

11・28(土) 午前、直哉と木下利玄は武者小路実篤を訪問し、ドイツ語の勉強をする。二時過ぎ帰る。(武者小路実篤『彼の青年時代』所収日記)

直哉は武者小路家で『小供の美』を執筆。(未定稿52)

「望野」第十九号発行か。

武者小路実篤の『日はのぼれり』(M41・11・26執筆)を掲載か。(『武者小路実篤全集』第一巻・解題)

11・29(日) 前日から二日間にわたって、東京音楽学校の第十九回秋季音楽演奏会。管弦楽「サクンタラ」、藤井(三浦)環独唱の「美はしきエレン」など。武者小路実篤も聴きに行った。(武者小路実篤『彼の青年時代』所収日記)(田辺久之『考証三浦環』)

未定稿53『竹本東猿を聴いて』で、「サクンタラ」に言及しているので、直哉もこれを聴いたか。

12・1(火) 「麦」第四号発行。(里見弴『雑記帖』)

里見弴の『文学雑感』(初題『偶感的文学論』)『家出』『江川さん』、『園池公致の「一義の望」』『住居』『出仕』『夢』、『児鳥喜久雄の「ハウプトマン」』、『正親町実慶の「永遠の花」』『夜の巨人』、『立寄りの記』、『田中治之助の「僕の生活」』『車中』掲載。(里見弴『雑記帖』)「麦」第四号批評欄・補④P489～491

12・2(水) 有島生馬が直哉に絵葉書を書く。マルセイユ三日の消印、麻布二十四日の消印。(『志賀直哉宛書簡集』)

12・3(木) 直哉は武者小路実篤を訪問。木下利玄も来る。(木下利玄日記)

12・4(金) 直哉は『竹本東猿を聴いて』を執筆。昨晚、東猿の浄瑠璃を聴いて感じた、西洋音楽が独立したものであるのに対し、日本音楽は文学を助けるものであり、その音楽的方面には、おひたしのようなまみがあることを論じる。(未定稿53)

12・5(土) 「望野」第二十号発行か。

この頃 直哉は、イブセンの話から、里見弴と議論をし、社会問題・政治問題を小説の材料として扱うことは、芸術を手段に使う事であり、真の芸術から見れば一段下がったものだと発言する。(里見弴『文芸の岐路(所感)』)(里見弴『君と私』二十七)

12・9(水) 有島生馬が直哉に絵葉書を書く。岩下家一は米国に行った、など。麻布三十日の消印。(『志賀直哉宛書簡集』)

12・10(木) 直哉は、「麦」第四号に批評を記す。昨晚、里見弴の所に行つて「麦」を借りて帰つて、深夜十二時から読んだ。

〔表〕第四号批評欄)

直哉は『物の観方』を執筆。一週間程前、大学の帰途、三条公輝に聞いた授業中に発狂した学生についての感じ方を分析し、先入観に当てはめるのではなく感情は自由にしておくのがいいと述べる。(未定稿54)

12・12(土) 「望野」第二十一号発行か。

〔表〕第五号発行。(里見弴『雑記帖』)

里見弴の『レッド・スポット』『文芸の岐路(所感)』『或る男の恋愛観』『恋』『直衛と文子』、正親町実慶の『彼女の夫』『今度の冬休み』翻訳『Rule of Life』(ツルゲーネフ)、田中治之助の『落はく』、園池公致『創作に於ける希望』掲載。(里見弴『雑記帖』)〔表〕第五号批評欄・補④P491-493(式場隆三郎『白樺の人々』)

12・16(水) 夜二時十分過ぎ、直哉は『沼津の沙鷗に与ふ』を書き終える。正親町公和が自然を愛する所から田舎を讚美し都会を罵っていることを批判したもの。「望野」第二十一号に正親町公和が書いた『文芸大会』にも言及。(未定稿55)

12・17(木) 直哉は『作する時の目的』を執筆。作家たらんとする者は、学説と批評に頭を下げてはいけない、自己の欲求を大胆に発表すべきだと述べる。(未定稿56)

12・18(金) 直哉は、「表」第五号に批評を記す。(表)第五号批評欄)

木下利玄が日記に《無車と月見草の合作をやつた。いつか自分のもつて居た筋をかへてかいた、無車の筆で大に活きた。序もかいた。》と記す。(木下利玄日記)

12・19(土) 「望野」第二十二号発行か。

12・20(日)? 直哉は、夏期休暇時分からの約束で、二年ぶりくらいに岩元禎を訪問。岩元は何年経っても変わらず一直線上をコツコツ進んでいる人で、それを直哉にも強いるので閉口する。「君などは余裕のある体だから三年かかっても四年かかってもいいから大学でしっかり美学を研究すべし」と言われたことに不快を感じる。(M41・12・24有島生馬宛書簡)

12・22(火) 直哉は、二月末の語学試験の準備のため、湯河原に行く。(M41・12・24有島生馬宛書簡)

直哉は、湯河原にて『湯ヶ原より』『一小田原』『二軽便鉄道』を執筆。(『子供四題』『四 軽便鉄道』草稿)

直哉は、湯河原にて『小説 清兵衛(梗概)』を執筆。後年の『真鶴』のもとになるもの。(未定稿108) *明治四十二年作としたのは直哉の書き間違い。

12・23(水) 直哉は、湯河原にて『弱意の利』を執筆。岩元禎に会って感じた、意志が強く予定通りに進まなくてはいけないと考

えるのはよくなく、自分の中に起こってくる新しい要求を尊重することが大切だという思いを述べる。(未定稿57) *明治四十二年作としたのは直哉の書き間違い。

武者小路実篤が、湯河原中西屋の直哉に葉書を送る。武者小路実篤は「望野」第二十五号には三十四枚の小説を出すとのこと。(『武者小路実篤全集』)

12・? 直哉は、湯河原にて『荒絹』を執筆。(17・4刊『或る朝』)(『創作余談』)

12・24(木) 直哉は、湯河原にて『師弟の關係』を執筆。師弟關係というのは、ある所で解消するのが自然で、親の子に対する師としての関係も同様だとする。(未定稿58)

武者小路実篤が湯河原中西屋の直哉に葉書を書く。『小田原』と二十三日に出した原稿を受け取った事、『弱意の利』『荒絹』を一番面白く読んだ、語学の勉強を頑張れ、「望野」第二十三号には明日中に何か書くつもり、第二十五号に正親町公和は『峠』という二十五枚以上の小説を書きたいそうだ、木下利玄は着物をぬいだものを書くそうだ、など。(『武者小路実篤全集』)

直哉は、有島生馬に手紙を書く。有島生馬の十一月二十五日投函と十一月三十日の手紙を湯河原に持って来て、昨晚読み返した。有島生馬とモデルとの関係は少しも不快な感じはしなかった、自分のような性分の人間にはモメンタリズムしかない、岩下家一が一月八日に横浜に着くので朝早く湯河原を引き払って会いに行くつもりだ、など。(M41・

12・24有馬生馬宛書簡

12・25(金) 直哉は、湯河原にて『偶感』を執筆。学校は、根性を汚くする、などと述べる。(未定稿59)

木下利玄が直哉に葉書を書く。二十六日の消印。(『志賀直哉宛書簡集』)

12・26(土) 直哉は、湯河原にて『無車に与ふ』を執筆。(未定稿60) *明治四十二年作としたのは直哉の書き間違い。

直哉は、湯河原にて『消息(武車へ)』を執筆。「望野」を週刊で永遠に続けると、皆悪達者になるかも知れない、大島に行っている里見弾が帰りに寄るそうであらう、など。(未定稿61)

武者小路実篤が直哉に葉書を書く。直哉の葉書と原稿を受け取った、「望野」第二十三号は今日出来る、これには直哉の『湯ヶ原だより』第一を出そうか、昼から木下利玄が来る、など。(『武者小路実篤全集』)

「望野」第二十三号が完成し、武者小路実篤は木下利玄と連名で、直哉に葉書を書く。「望野」第二十三号は多分二十九日に木下利玄が湯河原に持って行く予定、この号には直哉の「師弟の関係」「小田原」を出した、正親町公和の「志賀に笑ふ」も出ている、直哉の『偶感』が届いた、など。(『武者小路実篤全集』)

第二十三号には、武者小路実篤の「父」(M41・12・26執筆)を掲載か。翌年一月十日に、二行付け足されている。(『武者小路実篤全集』第一巻・解題)

12・27(日) 武者小路実篤が直哉に葉書を書く。直哉の手紙を受け取り、「無車に与ふ」を嬉しく読んだ、「志賀に答ふ」を「望野」第二十四号に出したい、木下利玄がそちらに行くそうだが、など。(『武者小路実篤全集』)

12・28(月) 直哉は、湯河原から、前日着いた柳宗悦と連名で、図師尚武に葉書を書く。明日、木下利玄が来る、正月には里見弾が来るはず、など。(M41・12・28図師尚武宛書簡)

12・29(火) 直哉は、湯河原にて『偶感 第二』を執筆。(未定稿89) *明治四十二年作としたのは直哉の書き間違い。
武者小路実篤が直哉に葉書を書く。『隣室の客』は面白く読んだが「荒絹」の方がよい、この葉書が着く頃は木下利

玄も湯河原にいるだろう、など。（『武者小路実篤全集』）

12・31（木）直哉は、湯河原にて『偶感（第三）』を執筆。（未定稿62）

直哉は、湯河原にて『アイドール』としての芸術（所感）（小説「破がめ」を見て想ふ）を執筆。今の所、自分の信仰は何かと聞かれたら芸術であると答えるのが一番適当、嘗てキリストを信仰した時代があったが、今はその信仰がすっかり崩れてしまった、と述べる。（未定稿63）

12・？ 直哉は湯河原で、以前有島生馬から貰った『サロメ』を読み、非常に面白く思う。（M42・1・11有島生馬宛書簡）